

留学ノススメ

日本から海外への留学生は、ここ数年で急増中とか。異国へ送り出す親と、自ら異文化に旅立つ若者たち。日本の国際化はいよいよ本格化だ。そこで、今号は海外留学に詳しい東京外国語大学の中嶋嶺雄教授に、周辺の事例からそのメリット、課題等を上げてもらった。また、後半では、青年会議所メンバーに留学体験談を語ってもらった。

収穫多い異文化体験

事例紹介でメリットから心構えまで

東京外国語大学教授 中嶋嶺雄

異文化間交流とは「文化を超える」ため

古くは遣隋使、遣唐使にその原型を

求めることのできる留学は、周知のよ

うに明治維新以来の日本の近代化の過

程でも、西欧文明の移入という点で、

実に大きな意味をもっていた。第二次

大戦後は、アメリカへの留学が主流を

占めてきたことはいうまでもない。し

かし、最近では、アメリカ以外の国々へ

の留学機会もかなりふえてきている。

私のゼミナール（国際関係論・地域

研究）に例をとってみると、現在、四

年生でスペイン、中国、アメリカへ、

大学院生でドイツ、アメリカ、メキ

シコへと長期留学（一年もしくはそれ

以上）しており、私のゼミナール出身

のドクター候補・クラスではフランス

のバリ大学での研究、中国の厦門大学

へ籍を置いてのフィールド調査という

例もある。同じく私のゼミナール出身

のI君は、カリフォルニア大学バーク

レー校への留学結果が実って、この春

に政治学のPhD学位を獲得しており、

数年前にはH嬢がドイツのボーフェ

ム・ルール大学で博士学位を取得した。ウーイン外交学院で修士号を取ったK君は現在、世界銀行の国際職員として



アフリカで活躍している。

このように留学先も多様化しており、それぞれの目的も学位取得、語学習得、研究テーマの発見などと様々に異なっているが、留学が目的とするところは、たんに留学生個人の国際的視野の拡大、外国語能力の向上、国際感覚の涵養といった点に限られるものではない。さらに一步すすんで、諸外国、諸国民の行動様式や特質をいかに深く理解するかという点にこそななければならないといえよう。

そのような理解ほど、容易なようで困難であるのが現代世界なのであり、そうした国際社会への旅立ちとしての

目標を持たぬものは「ドロップ・ダウン」

このように考えると、留学のもつ意義は無限に広がってくるのだが、そのためにはその留学が成功しなければならぬ。留学が成功するためには、本人がしっかりと目的意識をもって、その所期の目標を達成するために努力すること、そのような目標をもった本人を受け入れてくれる環境が留学先にそなわっていることの双方が必要である。

もう十年近く以前になるが、私は二人の女子留学生を米コロンビア大学の国際関係学部 (S.I.A. School of

留学が成功すれば、コミュニケーション・ギャップや文化摩擦を極小化して、異文化間交流 (Inter Cultural exchanges) を真に可能にするのだといえよう。

留学とは、結局は、異文化体験を積み重ねつつ、異文化を理解し、受容する、つまり「文化を超える」ためにこそ必要な生活体験だといってよいのではないか。著名な文化人類学者のエドワード・ホール教授は、文化を理解し、考察しないかぎり、外国人にとって異文化はつねに専制的であって、そこに外国理解を妨げる根源があると述べている (『文化を超えて』)。

している。

他方のO嬢は、問題意識はきわめて鋭く、勉強意欲も旺盛であったけれど、留学後の将来のコース設定が不明確で、本人にも迷いがあつたためか、留学が必ずしも順調ではなく、私はニューヨークへ行くたびにキャンパスを訪れて本人を励ましたものである。いかに強い意志をもった優秀な人材とはいえ、ニューヨークの、しかもコロンビア大学というような都市環境で女子学生としての留学生生活をまっとうし、授業やゼミナールの課題をこなして優秀な成績をおさめてくるということは、並大抵のことではない。

従って日本の大学に入れなかったから、日本でしかるべき大学院に入れなかったから外国へ留学するなどという安易なケースは、私の周辺には存在しないけれど、このような留学は問題外で、日本の大学にも適応できないのに、外国語の世界で異文化体験を重ねつつ留学を成功させることなどは、できるはずがない。

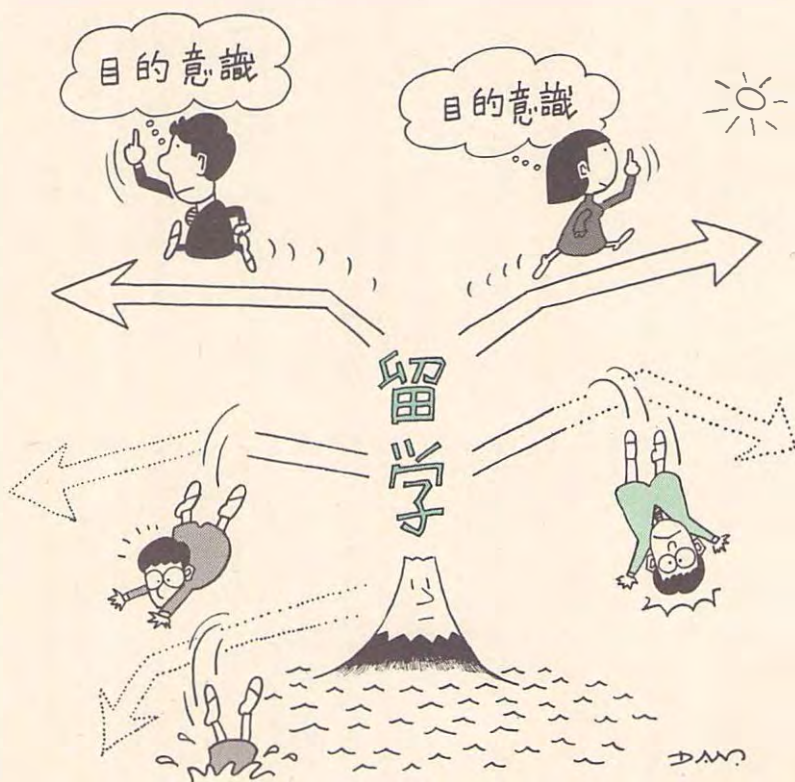
幸い、右のO嬢は、帰国後に留学の成果を活かして東京近郊の私学の専任講師となり、今日では立派な教育者として成長しつつある。

もとより、留学しても、その社会に適応できずに挫折する者、大学の学業

についてゆけずに挫折する者も数多い。私があるアメリカの大学を訪ねたとき、一人の学生の行方がわからなくなっていたのだが、同僚の留学生たちは彼は「ドロップ・アウト」ならぬ「ドロップ・ダウン」したと、いかにもライバルが一人減ってよかったかのように平然として語っていた。

オーストラリアの首都キャンベラにあるオーストラリア国立大学やフランスのパリ政治学院で私は客員教授をつとめたこともあるけれど、留学途中で挫折して、悶々と日々を送っている若者が多いことも知っている。彼らは大学や大学院のコースからはずれると、日本語を活かして図書館、研究室、日本研究センターなどアシスタントや日本語教師のアルバイトなどをやっているのが通例だが、その場合はまだいい方で、やがては日本料理屋やみやげ物店の店員、観光ガイドその他へと流れてゆくケースが多い。もとより、このような人生もそれなりに有意義であろうが、留学を目指した本人の当初の志望ではなかったはずである。

従って、大学、大学院レベルの留学でもっとも重要なことは、きちんとした目的意識をもち、留学年限にも期限を定め、一定期間を経たら帰国するという計画性が是非必要である。



イラスト・団 春郎

職業上の研修を目的とすれば効果的

そのような計画性を欠いてしまうと、いわば国際浪人や無国籍人のようにな

ってしまつて、留学がかえってアタになることもある。

この点で大学を卒業して企業や官庁に入ったのち、学位取得という目的ではなく自らの職業上の研修を目的として一二年留学をするケースは、きわめて効果的だといえよう。最近はこの

ようなケースが増えており、私のゼミ出身者でも東京銀行や日本長期信用銀行から香港、北京の大学もしくは外国語学院へ、日本経済新聞社から米スタンフォード大学やロンドンの戦略研究



所（I-ISS）へ、また防衛庁からバ
リ政治学院へといったケースがあり、
いずれも成功例だといえる。以上のケ
ースは、私のゼミナールに属した優秀
な学徒の例だといえようが、最近、
国際交流の活発化とともに、留学はも
はや一部のかぎられたエリートだけの
ものではなくなりつつある。だが、こ
の場合でも、アメリカ留学の場合には
TOEFL（Test of English as a
Foreign Language）の成績はできれば
六〇〇点前後は欲しい。一般のアメリ
カの大学への入学条件は五五〇点前後
だが、これでは不十分であり、まして
や一般の留学ガイドブックなどにある
TOEFLなしの留学生受入れ校での
聴講などという安易な道を選んでも、
結果はみじめな末路となること必定で
ある。

次に重要な問題は留学生の受け入れ
機関がしっかりしていることである。
大学卒の場合、日米教育交流計画（い
わゆるフルブライト計画）は歴史も古
く、優秀な人材を輩出してきたことで
知られているけれど、私の周辺では日
本の各地方ロータリー・クラブを經由
するロータリー財団の奨学金による留
学生やサンケイ・スカラシップによる
留學生が多く、きわめて効果的な結果
を生んでいる。ジョンズ・ホプキンス

大学高等国際問題研究大学院（SAI
S, School of Advanced International
Studies）に学んで現在、防衛研究所で
活躍しているK君、先述のI君などは、
いずれもロータリー財団の奨学生であ
り、日本のロータリークラブ会員の
方々には、日頃、大いに感謝している。
この場合にも、大学の指導教官による
推薦状を得て、受け入れ大学教官との
連絡をきちんとっておかねばならな
い。フランス政府給費留學生やドイツ
学術交流会（DAAD）の留學生、ア
リテイッシュ・カウンシルの留學生、
メキシコ政府交換留學生などは、いず
れも難関であるが是非すすめたものだ
であるし、中国政府留學生、インド政
府留學生として渡航する者も多い。
最近では約五十カ国に近い外国政府

柔軟で発育盛りの高校生留学は最善

がなんらかのかたちで留學生を募集し
ている。これらに加えて、日本政府の
奨学金によるアジア諸国等派遣留學生
制度、学生国際交流制度による留學生
などもあり、留学チャンスが多様化が
進んでいるだけに、留学はますます重
要な国際交流の分野になりつつあると
いえよう。

こうした各政府留學生としては、イ
ンドのジャワハルラール・ネール大学
の大学院で修士号を取得して帰国後国
会図書館につとめているT嬢、学部在
学中に中国広州の中山大学へ留学して
中国語（北京語）のみならず広東語に
も堪能になり来春から時事通信社記者
になるH嬢、北京大学への留学後、東
洋経済新報社に入ったM君などをあげ
ることができよう。

だが、なんといっても留学がもつと
も効果をあげるのには、高校生留学であ
ろう。知能が柔軟な発育盛りに異文化
体験をもち、親元を離れて独立心を培
うには高校生留学がもつともよい機会
であり、外国語の習得という点でも効
果抜群だといえよう。この場合は、い
わゆるホームステイを原則としている
ことのひとつ意義も大きい。高校生留学
には、夏休みを利用した二〜三カ月程

度のものもあるが、やはり一年間の留
学に挑戦すべきであろう。この場合に
は、留学先の学校できちんと単位を取
得し、できれば、先方の学校を卒業
（Diplomaの取得）していただくことが望
ましい（アメリカなどでは七月末に渡
航して九月に入学した場合でも翌年六
月に卒業証書を与えるケースが多い）。

高校生留学の主辛団体としては、長
い歴史と伝統をもつAFS（Amer-



ican Field Service)のエイ・エフ・エス日本協会がもっとも定評があり、またYFU (Youth For Understanding)も着実な成果をあげている。そのほかEIL (The Experiment in International Living)の日本国際生活体験協会なども信頼のおけるものである。

ここで私事にわたって恐縮だが、ちょうど私が大学生の頃、AFS留学の第一期生が入学してきて、その英語力やスマートな国際感覚に強い印象を受けたことがある。

そんなこともあったが、わが家では、男女二人ずつの子供たち全員をAFSの留学生として一年間アメリカの家庭にホームステイさせることをわが家の

学校制度上の問題も明るい展望にある

ちようと本稿を執筆中、『朝日新聞』(一九八七年十一月十五日付)の「声」欄に「外国留学での単位を認めて」と題する向山奈央子さん(東京都中学生15歳)の次のような投書が載っているのが目にとまった。

「高校時代の外国留学。これにあこがれる中・高校生の何と多いことでしょう。もちろん、私や私の周りの友達も例外ではありません。でも問題は、一年間留学した場合、外国での単位が認められないために、帰国してからその

ガイドラインとしており(一人は来年夏から留学)、同時にわが家でもすでに合計八名のホームステイの外国人学生を受け入れている。

もとより、わが国の厳しい受験システムが存在しているときに一年間を外国で過ごし、帰国してすぐに大学受験に直面することは過酷なことではあろうが、留学のためにたとえ一年間遅れても、留学で得た収穫は、子供たちの人生経路において、かけがえのない糧になるものだといえよう。異文化交流の重要性を身をもって体験し、またそれが決して生易しいことではないことをも体得するという点でも収穫は大きい。

一年分やり直さなくてはならないことです。……(中略)……国際人育成を高らかにうたっている割に、留学の単位を認めない、消極的な日本の教育制度に矛盾といら立ちを覚えます。厳しい留学だからこそ、日本の未来のために、私たちのために、門を広げてほしいのです。」

この投書は、まったく正しい主張である。文部省は、外国留学中の単位を認めるか否かは、各学校の自主性にまかせているとのことであるので、この

ような悩みが早く解消できるように、留学希望者やその父兄は、各学校には積極的に働きかけるべきであろう。

なお、最近では国立大学でも、外国の高校卒業の証明だけで共通一次試験および各大学の二次試験を受験して入学する学生が私が勤務する東京外国語大学や東京大学などで増えてきている。

帰国後、高校二年生に一年遅れて復帰して合格すれば、一年間の留学による遅れは取り戻せるのであり、この場合、日本の高校は中退ということになるのはやむを得ない。このようなケースが増える一方、一貫した学校教育が崩れることをきらう高校とくに公立高校が現状ではまだ多いけれども、むしろそのような多様な高校生が増大こそ、今日の受験教育中心の高校生活の活性化につながるはずである。

私学では、ICU(国際基督教大学)や上智大学のように、高校時代の留学生を積極的に受け入れようとする大学もある。このような開かれた私学こそ二十一世紀の日本社会にますます大きな役割を果たすと思われるだけに、この点で高校留学生的の将来には明るい展望が開かれつつある。

JICの父兄諸氏も是非、皆さんの子弟を高校生のように留学に出されるよう強く推奨したいと思う。

50億

社会と人間を考える総合誌

12

昭和41年7月25日第3種郵便物認可
昭和62年12月1日発行
(毎月1回1日発行)

1987

Vol.24 No.288



特集 留学ノススメ 中嶋嶺雄

日本でも今、「中堅・中小企業の時代」

会頭対談 ゲスト／ハーバード・パッシン

日本青年会議所